



じゃあ、明日ね



こひろ

「じゃあ明日ね」

そう言ったからといって、明日にその約束が実行されるとは限らない。

当時俺は県立の高校に通う普通の高校生だった。

俺は「天文部」という端から見るとちょっと「暗いイメージ」、今で言う「おたく」が好きそうな部活に入っていた。部員は10名で、3年生4人、2年生は俺を入れて3人、そして1年生は3人だったと思う。毎日放課後、部室に集まり、時に部屋の天井に手作りのプラネタリウムを投影することもあったが、あまり星の話なんかはせず無駄話をし、タバコを吸い（主に俺だけだが）、日が暮れて運動部の奴らが練習を終える頃帰る。

そんな、少し墮落した感じはするが、外からの「暗いイメージ」とは違い普通の健全な高校生の集まりの部だった。

ただ俺は、入部届を書いた記憶はないのだが……。

一年生のとき、秋の文化祭前に同じクラスで中学校も同じだった高沢紀子が声を掛けてきた。

「加賀君って確か手先が器用だったよね？」

「ああ、自慢じゃないけど技術工作だけはいつも成績は良いよ」

「もし暇だったら少し文化祭のうちの部活の準備を手伝ってもらえないかな？」

紀子は両手を顔の前で合わせ、お願いのポーズをした。紀子は顔もまあまあかわいいこともあるが、誰にでも気さくに接し明るいので男子受けは良く人気があった。

「えーっ、高沢は天文部だっけ？確かに俺はバイトもやめて暇だけど、そういうのは面倒くさいから嫌なんだよ。だいたい暗闇で男と女が星を見るなんて恋人同士がすることだろ？まして男と一緒になんて俺には理解できないから、やめておくよ」

俺はかばんを手に取り帰ろうと席を立った。紀子は俺の腕を掴み静止し再び手を顔の前で合わせ言った。

「お願い。無料とは言わないから。学食のカツカレー3日分はどう？」

ちょうどバイトをやめたばかりで金欠だった俺にとって、その安価とも思える条件はとても魅力ではあった。だが何で俺に頼むのだろうか？

「でもわざわざ俺にそんな条件を出さなくても、高沢が頼めばいくらでも手伝ってくれるやつ俺何人か知ってるぞ。俺が呼んできてやろうか？」

すると紀子はちょっと困った顔をして言った。

「だから加賀君なのよ。加賀君は交換条件にデートしようとか言わないでしょ？なんで手伝いを頼むとデートすることになるのよ、全く……」

なんとなく状況が読めたのでそれ以上は聞かなかった。

その日は文化祭の3日前で、クラスの催しは喫茶店をやる事になっており、看板やメニューはあらかじめ仕上がりは前日のセッティングぐらいだった。

そうして、学食の"大盛り"カツカレーに釣られ、適当に手伝うフリをしようとノコノコと顔を出したのだが、俺と天文部との"関わり"のきっかけだった。実際、男手が足りなかったらしく、大いに歓迎された。

天文部では毎年手作りのプラネタリウムを投影するのだが、その完成に目途がたたず、あまりに切羽詰った部室の雰囲気には圧倒され結局徹夜で手伝ったのだった。

そしてそれ以降も居心地の良さに部室に顔を出すものの、何もせずマンガを読み、皆が持ち寄ったお菓子を食い、コーヒーを飲み、タバコを吸う。だから部員として数えられていたかはずっとわからなかった。

「加賀君、明日暇？」

2年に進級した6月の梅雨入り後の金曜日、3年生の蓮沼実夏が話しかけてきた。部室の鍵は3年生しか持っておらず、3年生が全員帰るときが部の終了時間でもあった。気が付くと部室には実夏と俺しかいなかった。

「すみません。マンガに夢中でみんなが帰ったの気が付きませんでした。もう帰りますよね？」

「何言ってるの？明日暇かって、聞いているのよ」

実夏は話がかみ合っていないことを可笑しそうに聞きなおした。

「明日ですか？部活は勘弁してくださいよ」

いくら暇を持て余す俺も、さすがに土曜日の授業が終わった後は、天文部に顔を出したことはなかった。暇人と思われても、友達がいなくともイヤだという見栄もあったかもしれない。そんな俺の気持ちを無視するように実夏は相変わらず可笑しそうにしながら続けた。

「加賀君って天然だったんだね。この時期、誰も土曜日に部活なんか来ないわよ」

三度目の同じ言葉を実夏は言った。

「明日暇？」

どういう意味かわからなかった。昨年9月にここに居つくようになってから9ヶ月、俺は天文部員の誰とも学校以外で会ったことはない。まして先輩とはいえ美人の女性である。

「暇っていえば暇ですかね」

俺は先が読めず曖昧な返事をした。

何故なら実夏が、部長の田中大輔と付き合っていたのは部員全員の暗黙の了解だったからである。しかも田中が日ごろから、天文に全く興味を持たず、顧問の立川にタバコ臭い気がすると疑われる原因の俺を毛嫌いしているのは感じていたので、その彼女の実夏がどういうつもりで暇か聞いているのか意図が全くわからなかった。

実夏はそんな俺の思考など無視するかのようになり、髪を束ねているゴムをはずし、髪を振りほどきながら、またも可笑しそう言った。

「じゃあ明日私に付き合っ。午後1時に駅の大時計の前ね」

そんな仕草に、1つしか違わない歳以上の大人の女性を感じ、少しドキッとした自分がいたが、話の展開的には謎は深まるばかりである。変な宗教の勧誘だろうかとも思ったが、そうも聞けず、

「俺と先輩二人だけですか？」

と、少し困った感じで聞いてしまった。すると、今までの表情から一転笑みが消え、少し寂しそうな感じを見せたが、それを気のせいかと思うほど明るく聞いてきた。

「そうよ。イヤ？」

「イヤとかじゃなくて理由と言うか・・・」

俺は猜疑心から少しぶっくらぼうになっていた。

「そうよね・・・」

先ほど見せた少し寂しそうな表情を今度は隠さず、そして覚悟を決めた表情になり事の顛末を教えてくれた。文化祭が終わると3年生が引退するので、その後が心配なのだという。当然部の活動内容もそうだが、今の2年生は男が俺一人のため部長（夜の活動があるため顧問の立川は男が良いと言っているらしい）にせざるに得ないので俺に本腰を入れて部活動をしてもらいたいらしい。そこで、どうしたら天体に興味を持ってくれるか、考えたのだというのだ。多分田中の差し金なのだろう。俺が嫌いでも部の存続には必要なのだから。

「なるほど、そういうことですか」

「ごめんね。騙すようなことしようとして」

実夏はもう、観念したかのように申し訳なさそうに謝った。しかし俺は田中がどんな作戦で丸め込もうとしていたのか興味が出てきて聞いてみた。

「でも先輩、それで明日どうしようと思ったんですか？」

「うん。プラネタリウムにでも行って星の良さを語ろうかと・・・」

俺は急に可笑しくなって吹き出してしまった。いくら大人っぽく見えてもやはり歳は1つしか違わないのだ。あまりにも直球の作戦である。

「ダメだったみたいね。私の作戦。加賀君ここのプラネタリウムは、おもちゃだって見て見してくれないし、月1の観測会も来たことないから・・・。星の良さをなんとかわかって欲しくて・・・」

少しだけ泣き出しそうに見えた顔を見たら、さっきまで年上のお姉さんだった人が急にかわいく見えてくるから不思議である。田中のつまらない作戦に、がんばって任務遂行しようとしている、いじらしい姿を見て俺は思わず言った。

「わかりました。1時に大時計の前ですね」

立場が逆転した。今度は実夏がきょとんとしながら、

「えっ？だって？」

「いいですよ。騙されてあげます。何もなしじゃ田中先輩と立川に報告しづらいでしょ」

実夏は満面の笑みを浮かべ言った。

「ありがとう。じゃあ明日ね」

彼氏のためか、部のためかは知らないが、その献身的な行動に俺は実夏を好きになりかけたのかもしれない。しかしこの時はまだ、単に綺麗な先輩の顔を立てる位しか考えていなかった。とにかく実夏とのデートもどきはそうして決まった。

翌日は梅雨だから仕方ないが、雨だった。人の彼女と、理由も打算的なデートもどきを、やはりかったるく思い始めていたのだが、休み時間に実夏と廊下をすれ違う際、腰の辺りで手を振る姿を見て、きっとこの人は、もっと義務感でいっぱいなのだろうなと思い腹をくくりにした。そもそも昨日、作戦はばれてしまい、内容がわかってしまった今、効果は期待できないはずである。でも実夏は任務を全うしようとしている。

予定通り俺たちは出かけた。プラネタリウムなんて小学校の遠足以来だったが、適度の空調とシートの角度は、俺をものの5分で眠りへと誘った。

「どう？付き合いで来たものの今度は本物の満点の星を見たくなかったですよ？」

雨足が強くなり、雨宿りがてらに入った近くの喫茶店で実夏が口を開いた。

「そうですね」

あまりにも楽しそうに、そして純粋に話す実夏の前で、「寝てました」とは言えず、適当に相槌を打ってみた。

「夏の星はね、七夕のベガとアルタイルもそうだけど、明るい星が多いのよ。ただ空気が冬の方が澄んでるから、冬より星が少なく感じるけど。でもたまにこうしてプラネタリウムで星座の神話を聞きながら星を見ると、また違った感じでいいものね」

一所懸命に星を語る実夏に、俺は星ではなく実夏に興味を持ち始めていた。

「先輩はどうして天文部に入ったんですか？」

唐突な質問に感じたのか、実夏は不思議そうな顔で俺を見ながら、手元のアイスティーマの氷をストローで突っつきながら答えた。

「星が好きだからよ」

「いやそうじゃなくて・・・」

俺はあまりに当たり前すぎる答えに吹き出しそうになりながら、

「先輩昨日俺に天然？って言ったけど先輩ももしかして天然ですか？この場合、普通何で星が好きかを答えるでしょ？」

すると、本当はそんなことわかってるとばかりに真っ直ぐ俺を見た後に

「じゃあ、加賀君だけに教えてあげるね」

と、実夏は特別な事を言う感じではなくさらりと言った。

しかし次第にうつむいてストローでグラスの氷を混ぜながら続けた。

「何年前にアメリカの有人探査ロケットが発射後爆破炎上したでしょ？あの時日本人搭乗員がいたのを覚えてる？あれ、私の父だったんだ。だから父は星になった気がして、星を見ていると父と一緒にいる気がするの」

俺は呆然とした。確かに日本人がいたのは覚えている。しかし名前まで覚えていないが蓮沼という名ではなかった気がする。というか実夏に父親がいないという話も聞いたことがない。でもどちらも確信がなく次の言葉に詰っていると、

「嘘よ」

と言って実夏は笑っていた。

「加賀君ってかわいいね。そんなわけ無いじゃない」

俺は狐につままれた感覚を残しながら、その話題に戻れなかった。その後たわいのない話をし、俺はやはり天文部からそろそろ引き際かなと考えたころ実夏が切り出した。

「加賀君、天文部辞めるつもりでしょ？」

俺は焦りながら、

「そもそも入部してませんよ」

と笑いながら返した。

「いいのよ。私、本当のこと言うとね、昨日から今日がすっごい楽しみだったんだ。でも加賀君は私に仕方なく付き合ってくれてるだけじゃない？でもそれって天文部にきちんと腰を据える気なら、今日私に付き合う必要ないんだって、さっき気がついちゃった」

急に大人びた表情と話し方でまくしたてた。

「楽しかったよ今日は。あと誤解しているかもしれないけど今日の作戦、大輔・・・じゃなくて田中君も立川先生も知らないからね。昨日否定すると付き合ってくれなくなっちゃうから、言わなかったけどごめんね。でもどうやって腰を据えさせるか話があったのは本当だからね」

俺はこの時、実夏を好きになったんだと思う。「何故」かはわからないけど、「いつ」かはわかる。この時だった。俺は本来答えるべき退部については答えず、違う部分の言葉に食いついた。

。

「先輩、どうして田中先輩と付き合ってるのに、内緒で俺と出かけるのが楽しみだったんですか？」

「簡単なことよ。って大輔とは付き合ってなんかいいわよ」

実夏は、はにかんでいるのか、単にバツが悪いのかわからない表情のまま続けた。

「加賀君のことが好きだからよ」

俺は固まっていた。どう答えていいかわからなかった。3分前に好きだと感じた女の子に告白されたとはいえ彼氏持ちである。そんなに恋愛経験もない俺は、こういう場合はどういう言葉を返せばいいのか見当もつかなかった。しかし、先に実夏が口を開いた。

「嘘よ」

と言って実夏はうつむいていた。

「加賀君ってかわいいね。そんなわけ無いじゃない。」

それから1ヶ月、俺は部に顔を出さなかった。一度3年の結城直也が

「たまには顔を出せ」

とすれ違いざま声をかけてきたが、それ以外は特に何も無く終業式の日を迎えた。机でポーっとしていると、紀子が近づいてきてプリントを一枚渡し言った。

「来週合宿があるから、おいだよ。OBや顧問も来るし、夜通し観測だからそんなに楽しいもんじゃないけど、月一の観測会よりは星がたくさん見られるから。って観測会来たこと無いか」

顔は笑ってるけど目は笑ってなかった。場所は電車で2時間の県の青少年施設だった。

「気が向いたらな」

とそっけなく答えると、

「田中先輩と蓮沼先輩が別れたらしく、部の雰囲気最悪なの。だからお願い」

今度は顔も笑ってなかった。俺は何故か行かなければいけない気がして

「わかった。現地集合でいいか？」

と答えると、

「ありがとう。次期部長！」

そう言いながら今度は本当の笑顔で自分の席に戻っていった。

合宿の日は生憎の雨予報だった。しかし「場所を予約しているし、OBも文化祭より楽しみにしてるから決行よ」と前日の夜、実夏から電話があった。

「私は木村先輩の車で天体望遠鏡を積んで、結城君と高沢さんに行くから、現地だね。でも詰めれば乗れるかな。一緒に行く？電車組は2時に駅集合だけど」

3月に卒業した木村という人は、文化祭で少し話した程度の記憶しかないので、

「いや、大丈夫です、一人で勝手に行きますから。それより先輩久しぶりですね」

俺は田中と別れたのか聞いたかったが、それは聞けなかった。

「何言ってるの。加賀君が部活来ないからでしょ？」

笑いながら優しい口調ではあるが戒めのセリフであった。

「すみません・・・」

何と言い訳してよいかわからず、口ごもっていると、

「まあいいわ。明日来るってことはまた復活してくれるんでしょ？もう部長をやれとは言わないから安心して。じゃあ明日ね」

当日夕方、俺は電車で一人で合宿地に行った。7時くらいに着くと田中と立川が出迎えてくれた。しかし待っているのは俺ではなく車組の方らしかった。それでも「お疲れ」「よく来たな」などと声をかけてくれた。

9時ごろ雨は止んだが、曇っているため観測は中止と決まり、俺は一人で大広間の端にいた。すると、田中が横に座り声をかけてきた。

「加賀、実夏と付き合い出したのか？」

元彼としては俺が気に入らないのか少し口調が強い。

「いや、俺たちは別に・・・」

「まあいいや、そんなことは。実夏が俺たちは恋人じゃないって、ちゃんと加賀に否定してくれてうるさいからさあ。じゃあ言ったからな。それにしても遅いなあいつら・・・」

俺は頭が整理できなくて、半ばパニック状態だった。

「でも先輩たち付き合いってたんでしょ？」

そんなこと、いちいち後輩に報告するとは期待していなかったが、良い言葉が浮かばず直球で聞いてしまった。しかし思いがけず田中は答えてくれた。

「俺たち幼馴染でいつも一緒にいるから、よく誤解されるんだけど、付き合いではないよ。まあ俺はまんざらでもなく一度冗談めかして告白したんだけど、実夏には冗談でもやめてって本気で怒られたよ。そしたらそこを一年生に見られたらしく喧嘩してたって噂になってさ、俺も実夏も何から弁解したらいいかわからなくて、でも別れたも、付き合いがないも一緒かってことになったんだ。ただ最近何となく距離を置くようになってな・・・」

俺はやっと頭の整理がついた。勝手に彼氏がいると思い、そこからただ逃げていた自分をこの時初めて情けなく思った。実夏が着いたらきちんと好きだと伝えよう。実夏に彼氏がいるかは関係なく自分の気持ちを伝えるべきだったのだ。



しかし就寝時間になっても実夏の乗った車は、とうとう着かなかった。そして夜中起こされ、顧問の立川から知らされた。実夏が死んだことを。

免許取りたての木村の運転する車は、雨の中スリップしスピンした後電柱にぶつかり、後部座席の実夏だけが死んだらしい。あとは紀子も結城も運転する木村もほとんど無傷だったらしい。

外に出ると、空は晴れ、満点の星が広がっていた。横で田中が空に向かって呟いていた。

「実夏、きっとお前もお父さんと一緒に星になったんだな」

そのとき突然思い出した。スペースシャトルで事故死した日本人の名を。新聞の見出しは確かこうだった。

～星さん宇宙に行く途中、星となる～

「田中先輩、もしかして蓮沼先輩のお父さんって・・・？」

俺はまさかと思いながら、田中が何か知っているかと思い聞いてみた。

田中は一瞬驚いた顔をして答えた。

「お前何か知っているのか？実夏のお父さん、と言っても小学校に上がる前に離婚したらしいが、ロケットの発射事故で死んだんだ。だから実夏はいつも星を見ながら誰にも聞こえない声で話しかけていた。俺も直接聞いた訳じゃないんだけど、幼馴染だからうちの母親から聞いて知ってるだけなんだけどな。実夏は俺が知ってることがわかった後、絶対誰にも言うなって口止めしたくらいだから誰も知らないと思ってたよ」

そうだったのだ。あの日実夏の言葉は全て本当だったのだ。「嘘よ」という言葉以外全て。俺があの日、きちんとそれを理解してれば俺たちは付き合うことになって、今日だって一緒に電車で来たかもしれなかったのに・・・。

それからしばらく、実夏の「じゃあ明日ね」という言葉が頭を離れなかった。そして俺はこの日を境に少しだけ変わった。

相変わらずたいしたことは何もしていないが、思い立ったことは先延ばしにせず、その日に行動に移すことにしている。

実夏の俺に言った2回の「じゃあ明日ね」を忘れないために。

そう「じゃあ明日ね」が来ないことがあることを忘れないために・・・。